

あかしびと 109号（夏季号）2024年7月発行
日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会
☎236-0046 横浜市金沢区釜利谷西3-36-20 tel/fax 045-783-5475
（牧師）森島牧人・森島恵（協力牧師）並木裕忠
（教会） church.kanazawabunko@gmail.com
（ホームページ） kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp



「愛することは、与えること」 ルカ6：27－38

森島 牧人（牧師）

この聖句には二つの柱があります。第一は、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」（31節）であり、第二は「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となしなさい」（36節）で、その二つの柱が全体を支えています。またここでのテーマは、「愛すること」と「与えること」です。「愛する」という姿勢は、「与える」という行為に具体化されるからです。主イエスはそのことを、「私の言葉を聞いているあなたがた」と呼びかけつつ説いていかれます。聖書の「聞く」と言う言葉は「聞いて従う」という意味ですから、そこにもすでに「具体的な行動が伴うこと」が示されています。

その出発点は「敵を愛し、憎む者に親切にする」ことにあると語ります。ここで言う「愛」も感情ではなく、「親切にする」という心の姿勢のことです。

このような根本姿勢が身につくと、「悪口を言う者に祝福を祈り、侮辱する者のために祈る」との、口を用いた具体的な行動が可能になります。さらには手足を用いた行動、つまり頬を打つ者にはもう一方の頬を「向け」、上着を取る者には下着をも「拒まず」、奪い取る者から「取り返そうとしない」ことも可能になります。

ここでは「愛」が、心の姿勢が「愛と親切」という形に整うと、口が「祝福を祈り」はじめ、さらに手足が正しく動き始め、「向け…拒まず…取り返そうとしない」という一連の動きとして捕らえられています。

最後の手足の行動が最も重視されていることは、主イエスの呼びかけが「あなたがた」から「あなた」へと変えられたことから明らかです。こうして第一の柱である＜黄金律＞（「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」）へと進みます。

聖書は、「愛してくれる人を愛し、善いことをしてくれる人に善いことをし、返してくれることを当てにして貸す」のは＜お返しのお愛＞にすぎず、「罪人」、神を信じない人にも実行できる愛だと断

じます。

人が「敵、憎む者、呪う者」を裁かずに赦すことができるのは、「恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」神の寛大さを知っているからであり、神からくる寛大さが、人に惜しみなく「与える」ことを可能にすると、聖書は教えます。

然り。人が人を愛せるのは、まず神が人を愛して下さっているからです。キリスト者が敵をも愛せるのは、それを可能にするほどに深く豊かな神の愛の中に、生かされているからです。故に聖書は、「愛は神から出る」と語ります。

とすれば、私たちが「神を知らない人間」であれば、敵への愛が不可能なのは当然なことです。私たちが「神を知らない人間」、つまり自然のままの「人間」にとどまっていれば、愛は心の片隅の願いで終わってしまいます。この願いを実現する道に立つためには、愛の源である神との関わりに入り、「神を知らない人間」から「神を見つめる人間」に変えられる必要があるのです。

神は「その独り子を世にお遣わしになりました。…ここに神の愛がわたしたちの内に示されました」と聖書は説きます。つまり、独り子イエスの派遣に示された神の愛に気づくことが、他者への愛の出発点になるのです。

ですからこの呼びかけは、「恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」神が、世を支配する時節の<到来した>ことに基づいており、恵みを与える神は、神にならって与えようとする人にも、量りの中身を「押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに」満たして与え返してくださるとの「神の支配」（神の国）に人を招く「福音」なのです。

「新しく確かな霊を授けて下さい」

詩篇 27 章 13・14 節

使徒言行録 2 章 1－4 節

森島 恵 牧師

ペンテコステ主日の今日、示された御言葉はローマの信徒への手紙 5：2 の「今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」です。これは中学 3 年でバプテスマを受けた私にお祝いとして聖書を贈ってくれた父が、その聖書に書き添えてくれた御言葉です。父は母とともにホーリネス派の教会の伝道者でした。

バプテスマを受けた時の喜びは、その人のその後の人生を大きく左右します。本人は忘れていても、離れていても、神が聖霊を通してその人を捉え、働いて下さるからです。悲しい時、苦しい時に聖霊が寄り添ってくださる、これが私たちの教会の信仰です。ペンテコステによって各地に遣わされて主イエスの出来事を証しして行った群れが、二千年後の今も教会として続いているというのは聖霊の導きによる以外の何ものでもありません。私たちが今こうして礼拝に出席しているのも自分の決心によるのではなく、目に見えないけれど働きかけて下さる聖霊の力が一人一人に臨んでいるからなのです。

今日の交読詩篇に、「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。神の中の神に感謝せよ。慈しみはとこしえに。主の中の主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。」（詩 136：1－3）とありまし

た。信仰の生涯を歩むあなたの地上の命は、神さまが聖霊を注いでくださることによって神さまのものとして尊く用いられます。礼拝の奏樂を手伝ってくれる教会学校の生徒さんが強制されてではなく祈りとして教会の群れの中で成長して行くのを見せていただくのは何と幸いなことでしょう。

先ほど讃美歌21の342番を賛美しましたが、その詩は、1 神の霊よ、今くだり わが心動かして 弱き身を強くなし 愛に歩ませたまえ。2 主なる神愛せとの みことばに従いて 主の十字架仰ぎつつ み旨を示したまえ。3 主よ、共にとどまりて 疑いと争いの わが心うちくだき 力を与えたまえ。4 主の深き愛をもて わが心燃え立たせ 魂も身も献げ 愛に生かしたまえ というものです。この詩にあるように、神の霊こそ私たちが信仰の生涯を送るために、感謝して受取るべきものです。見えないけれど確かに働いて下さっているからです。

今日与えられた御言葉、「わたしは信じます 命あるものの地で主の恵みを見ることを。主を待ち望め 雄々しくあれ 心を強くせよ。主を待ち望め。」(詩27:13・14)はおそらく主イエスもお読みになったと思われます。私たちも「わたしは信じます。」という信仰に立ちましょう。この御言葉が詩篇に残されているということは、神を信ずる群れがいく度困難の中に置かれたことかを思わないではられません。昨年私は思いもかけず大きな病を経験しました。皆さんのお祈りをいただき、今日こうしてご用に立たせていただいています。この経験も人の痛みをより深く理解するためのものであったと悔い改めの心をもって思うようになりました。神のなさることに一つの無駄もないということです。

今日がその記念日であるペンテコステの出来事は、過越し祭から五十日後に行われる収穫感謝祭(五旬祭)の日に起こりました。そのころエルサレムは五旬祭のために世界の方々からやって来ているユダヤ人(ディアスポラ)でいっぱいでした。聖書には、アラム語かギリシャ語しか話せないはずのガリラヤ出身の信徒たちが聖霊降臨を受け、滞在している人々のさまざまな故郷の言葉を話し始めたこと、それを見て人々が驚き、とまどった様子が描かれています。これが使徒言行録2章に記されたペンテコステの出来事です。

これから賛美します讃美歌21の343番「聖霊よ、降りて むかしのごとく くすしき御業を現したまえ。代々にいます “霊”なる神よ。来たりてこの身に 満ちさせたまえ」は1903年ごろから一世紀を越えて歌われている讃美歌です。この賛美にあるように、私たちも信仰生活の中で「聖霊よ 来て下さい」と祈るのです。私たちみんな、これからどのような歩みをして行くか分かりませんが、祈らずしてことを始めてはなりません。「聖霊よ 来て下さい。私たちの教会を聖なる主なる教会に成長させてください。」との祈りを篤くし、賛美を大切にする教会として歩んで行っていただきたいと願います。辛いことがあっても、祈りをもって支え合い、赦し合って進んで行くのです。かつて弟子たちに注がれたように、あなた方お一人お一人の上に聖霊が注がれますよう祈ります。





目 次

「愛することは、与えること」(牧師) 森島 牧人	p.1
「新しく確かな霊を授けて下さい」(牧師) 森島 恵	p.2
「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」(協力牧師) 並木 裕忠	p.4
お証し「主を賛美しよう」 並木 和美	p.8
2024 年度年間主題「揺るぐごとなく、信仰に踏みとどまる」白根 義輝	p.12
「共育のあり方を教えてくれたUちゃん」白井 豊子	p.13
「水曜日集会」 高橋 清	p.14
「心のふるさと」佐々木節子	p.16
「近況について」梅谷興三	p.18
「主をたたえます」西山 律子	p.19
揺るぐごとなく、信仰に踏みとどまる」犬塚志朗	p.20
「森島牧人牧師、恵牧師に感謝を」羽入田 毅	p.23



「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」

並木 裕忠

今週も、主イエスが復活された週の初めの主の日の朝に、共に礼拝をお捧げ出来ますことを感謝しています。

本日は説教題に、今年度の主題聖句を掲(かか)げました。「揺(ゆ)るぐことなく、信仰に踏(ふ)みとどまる」です。礼拝堂の正面に掲げられています。

本日は、この聖句が含まれる聖書箇所を示されました。先程、朗読していただきました。ここには、まず、主なる神と私どもとの、以前の関係と今現在の関係が対比して語られています。初めの21節で、主なる神と私どもとの以前の関係が語られ、続く22節で、主なる神と私どもとの今現在の関係が語られています。

まず、21節です。「あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。」私どもは、神から離れていたと言うのです。それだけでも、神と私どもとの関係が悪かったのです。しかも、それだけでなく、「悪い行いによって、心の中で神に敵対していた」と言うのです。神と私どもの関係は最悪だったということでしょう。残念ながら、私どもの多くは、それにも気付かず、気付こうとしなかったのです。

そのような最悪の関係であったなら、神の審(さば)きが下っても当然です。しかし、続く22節では、その予想が全く裏切られるのです。こう言われています。「しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、傷のない者、咎(とが)めるところのない者としてくださいました。」驚くべきことに、神は、あなたがたと和解してくださった、と言うのです。さらには、私どもを聖なる者、傷のない者、咎めるところのない者としてくださったとも言います。まるで、突然、恩赦を与えられたかのように、私どもは赦され、罪の無い者として頂いたのです。さらに驚くのは、「神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し」と言われていることです。神は私どもを全く責めていないのです。しかも、ご自分の愛する御子を死なせることによって、私どもと和解してくださったのです。それは、あまりにも大き過ぎる犠牲をご自身に負わせられたということです。そこまでして、私どもを無罪放免としてくださったと言われています。申すまでもなく、これは主イエス・キリストの十字架と復活のことを言っています。十字架と復活によって、私どもの罪の一切が償われ、罪赦され、私どもを聖(きよ)い者としてくださったという出来事のことです。

その前の21節で、「あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました」と言われていますように、私どもが一方的に悪いのです。神の側に落ち度はなく、責められるべきは、間違いなく、私どもなのです。短い言葉ですが、ここに、神と私どものかつての関係が端的に述べられています。あまりにもはっきり言われているので、耳を塞ぎたくなりさえます。しかし、それは事実です。ある意味、旧約聖書に記されている私ども人間の実態です。それは、私ども人間が神に対して犯してきた罪そのものです。

しかし、神は私どもの罪を一切問うことなく、御子を私どもの身代わりとして、十字架に付けられ、復活させて、私ども一切の罪をお赦し下さったのです。これは、このコロサイの信徒への手紙への著者であるパウロが、別の手紙であるローマの信徒への手紙 第5章10節で言っていることと同じです。そこでは、こう言われています。「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。」

これこそ、十字架信仰の核心部分です。ということは、キリスト信仰の核心部分でもあります。私どもが礼拝ごとに告白しています使徒信条の核心部分も、ここにあります。これこそが、私どもが受け継いでいる信仰、教会が宣(の)べ伝えている信仰、福音なのです。

今年度の主題聖句、「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」で言われている信仰とは、まさに、この信仰なのです。

では、「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」との言葉について、少し詳しく見てまいりましょう。

ここで、「踏みとどまる」と訳されている言葉は、新約聖書の元々の言葉、コイネー・ギリシア語、すなわち、新約聖書が記された当時、庶民が使っていたギリシア語では、「エピメノー(“επιμενω”)”という言葉です。この言葉は、「上に」という意味の接頭辞「エピ(“επι”)」に、「とどまる」という意味の「メノー(“μενω”)”という言葉が付いたもので、「踏みとどまる」「いつまでも留まる」さらには、「滞在する」という意味の言葉です。

本日与えられました聖書箇所の中では、「信仰にとどまる」、「信仰に踏みとどまる」と使われています。同じ言葉は、ローマの信徒への手紙 第1章22節で、〈神の慈しみに、慈愛に〉「とどまる」という風に使われています。

ある方は、ここでの「エピメノー(“επιμενω”)”「踏みとどまる」という言葉は、神の真実の内に定住する、ずっと住みつくことを意味すると言います。神の真実、それは神の正しさと深い愛と言い換えることができるでしょう。すなわち、ここでの「踏みとどまる」とは、神の正義と愛に踏みとどまることで、まるで、神の正義と愛の中に住みつく、定住して動こうとしないことだと言うのです。さらに、「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」とは、建築のイメージからくる言葉だと言います。すなわち、地震や嵐があっても、揺るがず、しっかり建ち続ける建物をイメージしている言葉だということでしょう。

私どもは生きている間に、多くの出来事に出会います。良い出来事、幸せな出来事に出会う事もあるでしょう。しかし、良くない出来事、幸いとは言い辛い苦しい出来事に遭遇することの方が多いかもしれません。しかし、それでも、地震や嵐があっても、揺るがず、しっかり建ち続ける建物のように、「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまり」たいと願っています。そうすることによって、パウロが「あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」と言うように、福音の、良きおとずれの希望から離れないでいられるからです。

本日与えられました聖書、コロサイの信徒への手紙の著者とされるパウロは、コリントの信徒への手紙 一 第13章13節で、こう言っています。「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。」ですから、本日のコロサイの信徒への手紙の言葉、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」とは、私どもは、いつまでも残り、決して失われない、信仰と希望から離れず、踏みとどまることを言っています。それによって、神からの祝福と幸いを頂くことが約束されているからでしょう。

本日与えられました聖書箇所の最後、すなわち23節の後半ではこう述べられています。「この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。」この福音、良きおとずれとは、私どもは一切責められることなく、罪赦された、神と和解させて頂いたという良きおとずれです。その良きおとずれは、世界中至るところで多くの人々に宣べ伝えられている。この手紙を書いているパウロも、この福音宣教に仕える一人とされている。その福音を宣べ伝えている一人であるという事です。ここに、パウロの喜びが溢れています。この素晴らしい知らせは、世界中で聴かれている。私もその知らせを伝えている一人である。パウロは誇らしく語っているのです。

ところで、ここで言われている「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れなかった」人とは、具体的に誰でしょうか。そのように言える方を皆さんはご存じで

しょうか。皆さんの知っている方の中に、そのような方はいらっしゃるでしょうか。または、皆さんの知っている信仰の偉人たちの中にそのような方がおられるでしょうか。時間が許すなら、具体的に、そう思われる方々の名前を挙げてみるのも楽しい事だと思います。ただ、今は皆さんと一緒にそのような時間を取ることが出来ません。そこで、私が思い浮かべた聖書の登場人物をご一緒に覚えたいと思います。

それは、ルカによる福音書 第2章に登場するシメオンとアンナです。二人は、エルサレム神殿で、幼子(おさなご)の主イエスにお会いした人たちです。まず、シメオンです。ルカによる福音書 第2章25節以下に、こうあります。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」

このシメオンはこのあと紹介しますアンナと共に、しばしば高齢者であったと理解されます。そう思わせる記述はありますが、聖書にはっきりそのように書いてある訳ではありません。でも、「正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」とありますから、長年、信仰に踏みとどまっていたことは確かでしょう。長い間には、いろいろなことがあったに違いありません。それでも、揺るぐことなく、信仰に踏みとどまり、福音の希望から離れなかったのです。それゆえ、彼は主イエスにお会い出来たのです。そして、こう言えたのです。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」 自分の目で主イエスを見る事が出来た事、救いそのものでいらっしゃる主イエスにお会い出来たことで、シメオンは感謝に溢れたのです。このように大いなる祝福と幸いを頂いたシメオンを、私は昔から羨(うらや)ましく思っていました。今も、そう思っています。

そして、アンナです。こちらは、ルカによる福音書 第2章36節以下で、こう言われています。

36 また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとっていて、若いとき嫁(とつ)いでから七年間夫と共に暮らしたが、37 夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、38 そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

そのように言われています。「若いとき嫁(とつ)いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ」と言われていますので、たぶん、60年ほど寡(やもめ)として生きてきたのでしょうか。子どもがいたかどうかは書かれていませんが、当時、若くして夫を失った女性は、今日(こんんち)以上に厳しい生活を強いられたであらうでしょう。それでも、「彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりし

て、夜も昼も神に仕えていた」女預言者であったのです。まさしく、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、・・・福音の希望から離れなかった」と言えるでしょう。そして、「そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した」と言われています。アンナが喜びに溢れ、神を賛美し、嬉しさを抑えきれずに、「幼子のことを話した」様子が目に浮かぶようです。「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、・・・福音の希望から離れなかった」人の幸いな姿が、ここにも記されています。私どもも、シメオンやアンナのように、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、・・・福音の希望から離れず」にいたいものです。

今日、ここに集われたお一人お一人が「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、・・・福音の希望から離れず」、主の祝福を頂けますように、祈り願います。

共に祈りを捧げましょう。

私どもの救い主、主イエス・キリストの父なる神。今年度も、私どもに主題聖句を与えてくださいましたことを感謝致します。私どもに与えられた福音、そして、その福音を信じる信仰が、如何に貴いものであるかを、今、共に確認しました。私どもにはもったいないほどの福音を頂いていますことを、その福音を信じる信仰を授かっていることを感謝致します。どうぞ、揺るぐことなく、この信仰に踏みとどまっていけますよう、私ども一人一人を守り、お導きください。あなたの御子、救い主、主イエス・キリストのお名前によって、祈ります。アーメン



2024年6月30日お証 「主を賛美しよう」

並木和美

私は小学校一年生の時から教会学校に通い始めました。そのころから讃美歌は好きでした。「主われを愛す」「ペテロはガリラヤの漁師です」などがとても好きでした。人見知りでしたが、讃美歌だけは大きな声で歌っていたことを覚えています。

そんな中、ある時賛美に対する思いが一変する出来事がありました。それはまだ結婚する前、当時通っていた教会の伝道集会で、ある方の賛美を聴いた時のことです。その方はとてもきれいな声の方でしたが、聴いているうちに、その方の賛美は歌声の美しさを超えて歌っている言葉が生きて自分に届いているように感じ、「神様、本当にその通りです」と喜びが湧き上がってくるような体験をしました。いつも教会で歌っている「ふつうの讃美歌」が、まるで命をもって私に語り掛けてくるようでした。

当時私はすでに社会人でしたので、音楽を専門に勉強するつもりなど全くありませんでした。しかしその時は「私もこの先生のように賛美したい」という思いに駆られ、牧師に紹介していただいて、すぐにその先生のお宅を訪ね、歌の勉強を始めました。今思うととても積極的だったと思いま

す。

その後、何年かの中に私には思いもよらないことがいろいろ起こり、その時は「どうしてこんなことが」と思うこともありました。結果的に、私は38歳にして専門的に音楽を学ぶ機会が与えられました。嵐のような日々の中で、自分なりに悩んで進んできたつもりでしたが、振り返ってみると、ずっと前から神様がすべてをご存じで導いていて下さったのだと感じます。

学校では、音楽を学びながら宗教曲についてもいろいろ教えていただきました。特に、宗教改革者ルターの考えた教会音楽について学んだことは、今の自分の賛美に対する考え方にとっても影響していると思います。

ルターはドイツ語訳の聖書を作ったことで有名ですが、それと共に当時の教会で歌われていたラテン語のグレゴリオ聖歌に代わって、会衆が日常的に使っているドイツ語の歌詞による讃美歌（後にコラルと言われます）を作りました。これはとても大きなことだと思います。

歌には旋律と歌詞がありますが、ルターはドイツ語の讃美歌を作るにあたり、旋律については「みんなが歌いやすいものである」ことをなにより大切にしました。例えば、

- ① ラテン語のグレゴリオ聖歌の旋律にそのままドイツ語の歌詞をつけたもの
- ② 巷で歌われていた宗教曲や流行歌などの旋律を使ったもの
- ③ 新しく作曲されたもの（この中にはマイスタージンガーと言って、当時の人気の歌手が歌っていた曲の歌いまわしをまねたようなものなどもあります）

等、人々の生活に馴染んでいた旋律を積極的に取り入れています。

一方歌詞についてですが、ルターは「言葉を伝えること」をなにより大事にしました。彼は「賛美は会衆のする説教である」ということを繰り返し語っていますが、こうした言葉からも、ルターが「言葉（つまり福音）を伝えるために音楽を用いる」、と考えていたことがわかります。実は先日とても教えられたことがあります。トーンチャイムでアメイジンググレイスの練習をしていた時、私は「amazing grace how sweet the sound・・・と思い起こしながら演奏してみてください」とお伝えしました。英語の方が、一つの音に一つの単語がはまっていることが多く、トーンチャイムのように一人一音ずつ担当する楽器を演奏する時は、思いを入れやすいと思ったのです。しかしその時、ある方が「私はずっと『くすしきみめぐみ』で歌っているの急に言われてもわかりません」とおっしゃいました。私はとても反省しました。以前から英語の歌詞でこの曲を知っている私にとって、英語の歌詞はとても感動的であっても、それは共通のものではなく、むしろ日本語の歌詞で馴染んでいる方にとっては分かりづらいものである、それならば皆で一つのものを作り上げていく時は、皆がよくわかる言葉を使うべきであると思いました。話を戻しますが、たとえグレゴリオ聖歌がどんなに信仰的で、芸術的であっても、会衆はドイツ語を使うことによって、はじめて自分の言葉で神様への思いを歌い、また歌うことによってその気持ちを周りの人分かち合っていくようになっていきます。

ルターは36曲の讃美歌を作詞し、一部は作曲（神は我がやぐら）もしました。讃美歌21にも何

曲か入っています。日本語に訳したものとわかりませんが、ルターの作詩した曲はできるだけ「ふつうに喋るように歌える」ことを大切に、作られています。今では当たり前ですが、たとえば、日本語の歌でも「カラタチの花が咲いたよ」とか「この道はいつか来た道、ああそうだよ」のように旋律と言葉がしっかり結びついていると、歌にすることによってただ喋る以上に言葉の意味、歌う人の感情と共に聴く人に伝わってきます。ルターも『来たれ異邦人の救い主』の讃美歌の中で Nun komm den Heiden (異教徒) Heiland (救い主) アクセントのある所は高い音にしたり、低い音になってしまうときにはのぼす音が充てられたりと、できるだけ話すような抑揚で歌えることを大切にしていました。それは同時代の他の作詞者、例えば、同時代の宗教改革の指導者にトマス・ミュンツァーという人がいて、ルターと同じ旋律に歌詞をつけているのですが、それは言葉の流れを無視してただ音節に音を当てはめたもので、ルターとの違いは歴然です。ここからもルターが音楽にのせて喋るように歌えること、言葉(つまり思い)を語ること、伝えることをどれほど大切に思っていたかがわかります。

実はルターの前にもドイツ語による民間の宗教曲はあったそうです。しかし、旋律と言葉が切り離されていたので、それがのちの時代に歌い継がれていくことはありませんでした。喋るように語るように歌うことにできることによって、当時の文字や楽譜の読めない人々(16世紀ドイツでは都市部でも識字率は5パーセント程)にとっても讃美歌は覚えやすく、こうした讃美歌が時代を超えて人々に歌い継がれていくことになりました。

おまけですが、有名なヨハン・セバスチャン・バッハも、教会音楽に対して、似たような働きをしています。ルターの後、素朴な讃美歌は人々の生活に根付いていきますが、200年程たってバッハの時代になると、イタリアではオペラが生まれたり、音楽も発展していき、教会音楽は会衆で歌われる庶民的、素朴なもの、芸術的なものに分かれていき、多くの有名な作曲家は素朴な讃美歌を作ることはなくなりました(ヘンデル、テレマン、ブクステフーデとか)。そんな中、バッハはルター以降200年という時間をかけて人々の心にしみ込んでいる庶民的な讃美歌にこだわり、その歌詞、旋律を使った讃美歌を130曲くらい作って礼拝で用いています。当時のドイツの礼拝では、その日の聖書箇所をもとに、「教会カンタータ」という音楽を用いていました。今もそうですが、聖書と説教と教会音楽(教会カンタータ)は密接につながって礼拝を構成していました。カンタータには、ソリストや楽器の演奏も入りますが、バッハはほとんどの曲で、そのカンタータの最後の曲に、会衆が昔からよく知っている讃美歌を用いています。クリスマスにトーンチャイムで演奏した『主よ人の望みの喜びよ』もカンタータ147番の最後の讃美歌に使われています。この最後の讃美歌を会衆と一緒に歌ったかどうかは諸説があるようですが、ある本には「たとえ歌わなかったとしても、きっと心の中で歌っただろう」と書いてありました。きっとそうだと思います。例えば147番であれば、その讃美歌の「イエスは変わらない私の喜び、なぐさめです 私はイエスを離しません」という昔から知っている旋律、歌詞が出てきたら、会衆は自分の心の思いとして、この曲を心の中で歌っただろうというのです。多くの作曲家が、より芸術的な音楽に流れていく中で、バッハは当時確立されていた調性とか和声的音楽などの音楽技法を用いながら、ルターが考えたように何より「その言葉を、思いを」伝えるためにみんなの心にある讃美歌を、そのまま教会で用いる信仰の歌として発展させていったのです。

アルベルト・シュバイツァー（1875～1965）は、このように言っています。「多くの巨匠たちはメロディーに和声をつけた。バッハは歌詞に対して和声をつけた」と。いかにバッハがその讃美歌の言わんとする歌詞を、思いを大切にされたかということだと思えます。

ラテン語のグレゴリオ聖歌が人々の生活からかけ離れていってしまった時、ルターが自分の国の言葉による讃美歌を生み出したように、バッハもその時代の最先端の複雑な音楽ではなく、民衆のただなかから生まれた讃美歌を大切に礼拝音楽の基礎を作ってくれたことは、私には、キリストが幼子のような私たちにもわかる言葉で福音を語られたことに、何だか似ているように感じます。ルターやバッハ達先人が何より大切にしてきた「神様への思いを自分の言葉で伝える賛美」を私も大切にしていきたいと思っています。

今、私は教会で聖歌隊とトーンチャイムクワイヤーの活動に参加させていただいています。メンバーは、どちらも小学生からご高齢の方までです。年齢、性別、社会的役割などそれぞれ全く違っても、「神様を賛美する者」として、私たちは一つになって練習しています。聖歌隊にもトーンチャイムにも大切だと思うことは、賛美は人の思いがあふれて、音楽になるということです。聖歌隊がイースター礼拝で「平和初めて知った」を賛美した時、ハーモニカとピアノが前奏をしてくださいました。私は前奏を聴きながら「平和初めて知った イエスに出会ってから」という歌詞が心に響き「本当にその通りだ」と思い、前を見たら賛美する聖歌隊のみなさんの表情も輝いてみえたので、胸がいっぱいになりました。聖書には「主を賛美するために人は創造された」（詩篇 102：18）とありますが、逆に「主を喜ぶことは私たちの力」（ネヘミヤ 8：10）と聖書が約束してくださっていることも真実であると思えます。ですから賛美はお祈りと同じように、人間が一方的に神様を賛美するものではなく神様がそれを喜び、私たちに力を与えて下さる、神様との対話あるいは相互作用があるものなのではないかと思えます。

イースター礼拝でトーンチャイムクワイヤーの「アメイジンググレイス」の演奏を聴いた一人の男の子が「僕もやりたい」と私に話しかけてくれました。トーンチャイムはみんなで一生懸命に練習しましたが、完璧だったわけではありません。しかし、彼の言葉を聞いて、私は「これが伝道なのかな」と思いました。私が昔そう思ったように、誰かの賛美を聴いて、「私もやりたい」とその賛美の輪が広がっていったら素晴らしいと思っています。それぞれが神様から与えられているものは違っても、今はこれしかできないと思うことはあっても、精一杯努力して一人一人が神様への思いをもって賛美する時に、神様が働いてくださるのではないかと思えます。彼の声がきっかけとなって、日曜日の午後に、子ども大人も一緒にトーンチャイム、ベル、リコーダーの練習を始めるようになりました。「カナリヤサロン」という集まりです。皆、初心者ですが、頑張っています。私にとって、とても楽しい時間です。



2024 年度年間主題「揺るぐごとなく、信仰に踏みとどまる」

白根 義輝

「高齢者」と聞くと、自分もいつかそのように呼ばれるようになるんだろうなと、他人事のように思っていましたし、まだ遠い先のことだと考えていました。

新型コロナが流行り始め、ワクチンが話題に上り始めると同時にどこでワクチン接種できるのかが気になりました。そこで、横浜市のホームページを開いたところ、(1)医療従事者等、(2)高齢者と記してあった。コロナと最前線で闘っておられる医療従事者、罹患すると死亡率が高い高齢者が優先されるのは当然だと思いながら注意してみると、高齢者とは（令和3年度中に65歳に達する、昭和32年4月1日以前に生まれた方）とあるではないか！

私は、数年前から既に、高齢者の枠に入っていたことに気が付き驚いた。

数年前まで、横須賀ベースの小学生を教えていたが、そう言えば65歳から国民年金をもらっていたことを改めて思い起こし、「自分は高齢者」という自覚が足りなかったことを反省した。

以前、姉から言われたことを思い出した。「昨日までできたことが今日はできない。いよいよ自分もそうになってきたかと思うことがいくつもある。

洗濯物を干す時襟回りを整えようと思ってボタンをかけようとするがこれが上手くいかない、パソコンで文字を打つ時も両手でできていたが指が上手く動かない。確かにできないことが多くなってきた。中でも困るのは

ギターを弾くとき指や手がつるようになったのにはさすがに驚いた。

教会では賛美に力をいれていこうとする矢先に歌えない、楽器の演奏もできない自分に嫌気がさすのは歳（72歳）のせいと諦めている毎日である。

周りをみると森島牧人牧師をはじめとして年上の方々がいらっしゃいますがどの方も頭脳明晰で何も困っていないようにお見受けできる。自分は自分、神様が与えてくださったのが今の状態なのだと思っている。会話をする時、特に電話をする時など話し相手に聞きづらくて申し訳ないと思うとき、神様、きちんと話せるようにしてくださいと祈る。このようにできなくなっていることが多くなっている。

家族のこと自分こと信仰のことなど数多く心配事はあるが毎朝の祈りの時に、「揺るぐごとなく、信仰に踏みとどまる者とさせていただきます」と祈る日々です。年間主題に励まされて生かされています。



共育のあり方を教えてくれた U ちゃん 白井豊子

左手で、私の手をぎゅっと、強く握った U ちゃん。

初めて出会った時から、35 年たっていた。言葉も言えなくなり、車椅子生活になっていた。もう 45 歳になっていた U ちゃんだが、こけしのような顔に変わりはない。

10 歳の頃の U ちゃんは、右半身不随の体をものともせず動き、はっきりした声で話す子だった。

「U ちゃん、覚えているかな。豊子先生だよ、ぎゅっと握ってみて」

と、語りかけた時、昔と変わらぬ強さで、私の手を握った。施設の方は、U ちゃんは記憶力もだめになっていると言うのだが、この握手から、何か覚えているのでは、と思えた。

U ちゃんとの出会いは、私が大学を出て、知的障害児施設指導員として、住み込みで働いた時だった。五人の女子の母親役だった。重症で食事も排泄も、介助を要する H ちゃん、ダウン症で明るい A ちゃん、癲癇(てんかん)発作のある Y ちゃん、しっかりしているが、嘘をついたり盗んだりする M ちゃん、そして U ちゃんだ。

思い描いた仕事とは違い、日々単調な生活指導に明け暮れた。私は耐えられない思いとなり、時計やカレンダーとにらめっこする時が二カ月位続いた。子供達に対しても、事務的にやらねばならないことをやっていくだけだった。それを見抜き、ことごとく反撥したのが U ちゃんだ。

しばらくして、私の心にも諦め的な気持ちが生じて、U ちゃんと一緒にふざけ合うことがあった。その時の U ちゃんは右半身不随の体を揺らせ、大きな声をあげて喜んだ。それからだった。私が「一緒にやろう」と声がけすると、U ちゃんは我先に動くようになった。

共に楽しみ、その子の心に沿った時、共育が始まるのだと、身にしみて感じた。U ちゃんは教師の姿勢を教えてくれた。

U ちゃんは、偽りに対して鋭く反応する子だった。施設内特殊学級に行っても、いつも一人園庭に出て歩いていた。学級では、午後メロドラマのテレビを見せられている、ひどいものだった。私は昼の大切な時、子供達と関わるのは養護学校教員として進む事だと思った。

冬休みに U ちゃんは、一人施設に留まると聞いた。U ちゃんの家は子沢山で忙しいからという。その時、葉書に「いちにちでもいいから、かえりたい」と U ちゃんは、なぞって書いた。それが家族に通じて、迎えが来た。その時の U ちゃんは大喜びだった。こうして U ちゃんと私は、一層仲良しになった。

3 月末、私は進路を定めて、施設を去ることにした。春休み直前に U ちゃんにも伝えた。U ちゃんはお迎えが来ても、立ちすくみ、なかなか家に帰ろうとはしなかった。

それから 35 年後の出会いだった。

心の通じ合いこそ、共育のもとだと伝えてくれた U ちゃん、一生の宝をくれた。感謝。



水曜日集会 高橋 清

6/19で「キリスト教入門読書会」が終わりました。殆んど無休にて文字通り
"継続は力なり"で 読んだ本は

- ①遠藤周作著「深い河」,
- ②トマス・ア・ケンピス著「キリストにならいて」
- ③出村彰著「再洗礼派」
- ④内村鑑三著「キリスト信徒のなぐさめ」
- ⑤隅谷三喜男著「賀川豊彦」

等々でした。こうしてみると其の内容の濃さに自分でも吃驚しています。

思えば途中で止めたく成った時も有ったけど「此处で頑張る事に由って其が自分の血となり肉と成るんだぞ」と心に言い聞かせて頑張ってた良かったなあと思います。正に"牧人先生に感謝"で、十数年前も関東学院大生涯学習講座「宗教論」を教えて頂いた事等を考えると、先生との再会は正に"知的な巡り合い"と云え、私の精神的支柱でも有りました。諺に「求めよ！さらば与えられん」の文言がある様に、やはり積極的な人生を送っていると結果は自ずとついてくる感じがします。今此れ等の本を傍らに置き折に触れまた読み返していき、今後の人生訓としていきたいと想っています。



高橋さんの水曜日集会での発表は A4 サイズの用紙に手書きで 8 ページ、驚くほどの努力なさっています。

「賀川豊彦、隅谷三喜男 著

1
2024 5 8

Ⅳ 下層農民の窮迫とその解放
1. 日本農民組合の結成 (P132~141)

1. 1920年末頃から賀川は日本の労働運動が自分を必要としなくなっている事を認めざるをえなくなっていた。
更に彼の胸に去来したのは貧しく虐げられた農民達の姿であった。
「私は徳島県の農村で育ったので、その農村が破壊させられていく有様を見れば悲しんだもので、今もその悲しみは消えていない。日本の農村が救われるのは何時だろうか? (1919年6月に警醒社版「精神運動と社会運動」より)
1) 1920年秋 協力者の杉山元治郎(註)に対し、賀川は「労働運動は私がやるので君には農民運動を頼み度い」と。翌1921年秋のILO第3回大会に於て農業労働の問題即ち「結社の自由と権利の確保」が農業従事者従って小作人に対するも其の権利が国際的に確保される事となった。
2) 賀川は愈々農民組合運動開始の時期到来と考え、1921年10月中旬に杉山と計画を練り、大阪毎日新聞に「日本農民組合生れる」の記事を載せた。其結果全国の農民に知れ渡り、多大の反響を引き起した。
①此れより先、各地に小規模な小作組合が組織されていた。
②第一次大戦(1914年)の末期以降に作られた組合はデモクラシー運動や労働運動の影響を受け、地主に対抗して小作人の利益を守る事を目的とするものが大部分を占めた。
2. 小作組合の結成が多くなるにつれて、小作争議も各地に見られるようになってきた。此の間の事情について、農林省の報告は下記の様に述べている。
1) 第一次大戦後の時勢の変遷即ち農家経済の逼迫等や各種の社会運動思想の変動等の影響を受け、地主・小作人の関係に変化を来して旧来の慣習を脱していった。
2) 更に互に進んで法律上の権利を主張したり、或いは対抗的性質を有する団体を組織させて各々其の利益を擁護せんとしたり、小作争議の件数も急激に増加した。
3) 其の争議の質に於ても深刻の度を加え、小作条件等の永久的改訂の要求を目的とする案件も増えていった。
抑えて地主・小作人間の問題は日本の農村問題の中心的テーマに成るべく観を呈していた。
3. 小作組合の多くは村や部落を単位とする単独組合で、組合相互間の連絡や確固たる指導方針にも欠けており、争議も自然発生的なものであった。
其れ故農民組合結成の時機が満ちていたのである。





心のふるさと

佐々木節子

山口駅の改札口を出ると、正面の小高い丘の上の教会が迎えてくれます・・・迎えてくれていました。

この教会を見ると自然に笑みがこぼれ“帰って来た”と実感させられていました。

「ザビエル教会」、設立 1951 年、室町時代末期にフランシスコ・ザビエルが布教に訪れてから 400 年を記念して建立。ロマネスク式の 2 つの尖塔からは、15 分おきに鐘の音が市内中に響きわたり、この音を聞きながら育ちました。この音があるのが当然の生活でした。それが、1991 年 9 月 5 日全焼。朝、台所に立っていると「山口の教会が燃えている！」という子供の声でテレビを見ると、炎に包まれ、崩れ落ちる教会は衝撃的でした。信じられない有様でした。

私の両親は共働きだったので、平日は伯母が家事をしてくれており、週末は、クリスチャンだった伯母について教会に行っていました。当時の聖堂内は畳敷きで、冬は随所に置かれた火鉢で暖をとりました。白いレースのベールをかけ、ひざまずき、すくっと上半身を伸ばした伯母は、普段家事をしている伯母とは別人のようでした。大人になれば私も憧れのベールをかけ、素敵な女性になれると思っていました。が、現実には小学生になれば遊びに夢中になり、夏は川で泳ぎ魚を取る日々、冬は学校帰りに、雪が積もった教会の階段の 1 番上から、段ボールをお尻に敷いて下まで滑っていました。下着までびしょびしょになって帰る日々、教会は遊びの場となりました。

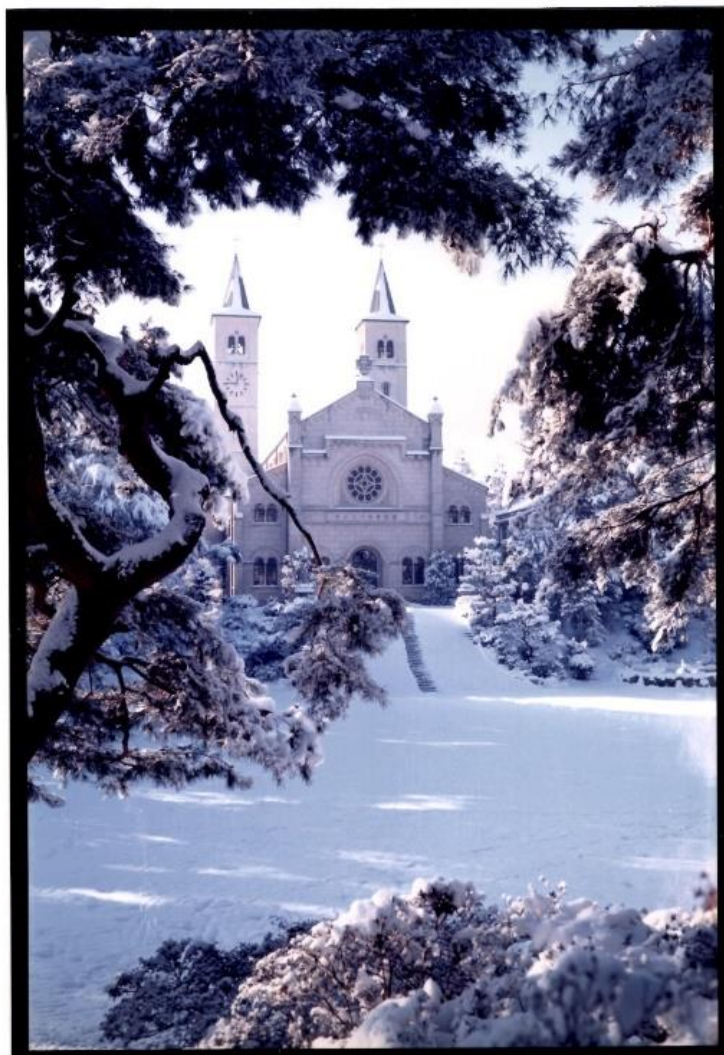
その後、長期の休みに帰省した折に、子供たちにステンドグラスを見せたくて教会に行きましたが、何十年もどこの教会にも足を運ぶことはありませんでした。母の死に直面し「死」をどのように捉えたらいいのか、この苦しみから救って欲しい、と無意識に伯母の姿勢を取っていた時に、心に響いていたのは山口の鐘の音でした。この話を文庫教会のある信者さんにすると「貴女が伯母さんと教会に行っていた時から神様は選んでくださっていた。どうして扉を開けないの？」と言われ、文庫教会に行くようになり、受洗しました。

ザビエル教会の 2 つの鐘のうち 1 つは完全に火を被りましたが、もう 1 つは火から逃れ、ずっと保管されていました。それが、横浜市南区の清水ヶ丘教会が新築された折に備えられました。何という縁でしょうか！“私の元に帰って来た”と嬉しくなり、早速日曜日に鐘の音を聞きに行きました。が、残念ながら、住宅密集地故、単音しか聞くことができませんでした。

50 代後半に、念願だったサンティアゴ・デ・コンポステーラを歩いた時、旧ナバラ王国にあるザビエル城（日本人しか入れない秘密の部屋があるそう！そして大内義隆の遺品等も）に行く予定でしたが、巡礼路からかなり離れ、タクシー代も高かったので悩んだ末に諦めました。ザビエル教会

と似ているといわれるお城、未だにその時の判断に拘っています（笑）。

陽に照らされたステンドグラスが見事で、簡素な中に荘厳さをかもしだしていたザビエル教会。子ども心に雰囲気が好きで、毎週行ったあの教会。もう 見ることも、触ることもできない教会です。





近況について

梅谷 興三

先日6月16日 前期懇談会があり 森島牧人牧師の回想を含めた教会の足取り、並木牧師の抱負・展望を伺い、感謝の念を禁じえません。今この教会は新しい時代を迎えようとしています。今までの現状をしっかりと把握したうえでステップを踏み出せればと思います。現在キリスト教界は青年は少なく、決して隆盛しているとはいえない、むしろ停滞していると言ったほうがよいのではないのでしょうか。これは日本の国全体が少子高齢とに苦しみ、政治の停滞、腐敗の除去も簡単なことではないことと関係は無いのでしょうか。

水曜集会(キリスト教入門講座)では 牧人牧師の指導のもとで約10人のメンバーで、遠藤周作、マルチンブーバー、等を経て、最近は隅谷三喜男著「賀川豊彦」についての読書会の機会が与えられました。この「賀川豊彦」について 感じたことを紹介します。

経歴欄によれば

賀川豊彦は1888年(明治21年)1960年(昭和35年)病没。徳島で出生、数年後父母は死去、本家にひきとられ、県立徳島中学校に入学、宣教師Cローガンに英語を学び、翌年マヤス博士より洗礼を受ける。阿部磯雄等の著作を読み キリスト教社会主義に共感を覚える。

1909年 神戸の新川で路傍伝道を始め、貧民窟に入る。この経験により書かれた小説『死線を越えて』が当時ベストセラーとなり経済的にも彼の運動を支えた。以後労働運動、農民運動、共同組合運動の先頭に立つも、当時ロシア革命の影響もあり革新系からは生温いと批判されながらも、一線を画しあくまでキリスト者の立場を堅持、それでも ファシズム化した日本では危険思想と見られ、逮捕 拷問をうけ一時は転向したにみえたが、主義を貫いた。

彼の講演会はその都度500人以上集まり大盛況でキリスト者も増加したといわれている。忘れられたかにみえる賀川の存在に改めて感動する。現在 日本のキリスト教会ではあまり知られていないが、賀川は国外では評価されていて、インドのカンジー、シュバイツァーとともに世界の3聖人とも呼ばれている。またノーベル平和賞の推薦を何回も受けている。彼の率直な発言には教会は互いに助け合うことが大事、助け合わない教会は教会ではないとまで言い切っている。反省させられる。しかしそのためには、互いの交流が大切、懇談会は有益でその一歩であると思う。





主をたたえます

西山 律子

私たちの教会、金沢文庫キリスト教会では
第五主日礼拝は、「賛美と証し」の楽しい礼拝です
いつものエルピスの奏楽に合わせ
神様への賛美、賛美、賛美です

詩編 150 編では「神様を賛美せよ」と 11 回出てきます
主なる全知全能の神様を賛美できることは
賛美させていただくことは
感謝しかありません

主なる神様を賛美すると
神様も私たちに力と恵みを与えてくださり
私たちは生き生きとした恵みに満ち満ちた者へと
変えていただくことができます

今年の 3 月の木曜日の賛美集会で練習した「主をたたえよう」の賛美です

主をたたえよう 心から
素晴らしい神を伝えよう
神のみ名によって
主をたたえよう ころから
よろこびはすべて あなたから

ハレルヤ





「揺るぐごとなく、信仰に踏みとどまる」

犬塚志朗

「あっ、無い！大事な財布が！ 私の財布が行方不明に気づいたのは6月26日、教会の水曜日集会後、帰り道にクリニックに寄っての受付でした。受診カード、マイナンバーカード、IDカード、現金少々など生活必需品の入った財布です。紛失すれば私は生活し続けることは難しいと考え、眼前が真っ暗になりました。細かいことに繊細で、日頃用心深い私はどこに落したのだろうか、ポケットから滑り落ちたに違いない。胸騒ぎがして、探しに教会までの通り道程、ドキドキハラハラしながら、目をきょろきょろさせながら、炎天下自転車で戻りました。途中坂道は自転車からおりて上りました。見つからなければ「もう人生終りだな！」とまで追いつめられました。「神様！どうぞお助け下さい!!」と幼子のように思わずお祈りしてしまいました。このような切羽詰まったお祈りは、最近したことがありません。教会の裏口から鍵を開け、恐る恐る中をそおっと覗きました。薄暗い部屋のテーブルの下に、入り口から漏れる光に反射して何か黒光りする物が落ちてるのに気づきました。「あったぁ！テーブルの下に！」当日の水曜日集会の昼食時に滑り落としたのです。炎天下を坂上の教会まで小さな自転車で2往復して再びクリニックで受付をすませることができました。……私とこの財布の関係は、水曜日集会で学習したマルチンブーバーの「我と汝」の関係でお互いに呼応していて私が早く探しに来るように財布が光を放って私を待ってたような気がします。また、日頃運動不足の私には、これも神様からの導きかもと今は思っています

・・・・・・・・・・・・・・・・

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……私は葬式は仏教、そして慶事は神社でパチパチ二拍子手を打ち手を合わせてお辞儀してお祈りをする神道で育てられました。自宅の奥間全体に豪華な仏壇が備え付けられ、そして仏間の前の客間の鴨居には神棚が飾られていました。私は農家の4男坊として、自然豊かな農地に囲まれて育ちました。

春は、まさに「菜の花や月は東に日は西に」蕪村の俳句通りの美しき村です。そして夏の田植え後の田んぼはゲロゲロ蛙の合唱…ドジョウも泳んでいる、秋はトンボの飛び交う黄金色の稲穂に囲まれて登下校…。

やがてタバコ好きの父は胃癌にかかり、5年ほど闘病生活の末46歳で逝去、母も看病疲れか、46歳で逝去。重なる自宅での葬式に行われた仏壇前でのお経は暗記するほどになりました。一家跡取り息子、中卒の兄、を中心に私たち弟キョウダイは中学・高校生活を送りました。

1959年の秋、私が高2の時、かの有名な伊勢湾台風に襲撃されました。ミシミシ家が悲鳴をあげ、天上の鴨居にヒビが入り、危険を感じ、父母を失った私たち家族一同は二階の物置室に逃げ込んでゆらゆら揺すられました。揺すられるごとに、ひたすら「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏！」と大声で唱えました。(ただ一人幼い弟が真ん中でスヤスヤ眠り込んでいたのが印象的)。私たちは立派な(?) 仏教徒でした。

そんな私は繁忙期には中学校を休んで農業の手伝い、でも高校は受験校の県立岡崎、大学は月謝の安い学芸大学（将来の県内公立の小中校の教員養成）に通いました。大学は合格したものの親代わりの兄は問いました、「行くのかい？浪人する気はないのか？」と。

その大学での英会話の先生はたまたま福音ルーテル教会の牧師（宣教師）でした。「えっ、国立の大学なのに教員としてキリスト教の宣教師？」初めてキリスト教に触れました。そこでびっくりしました。この世の中に神様を信じている人がいるんだと。そしてその教会に通うようになって受洗しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ある時宿泊がてらの地区の教会合同の大会が開かれました。そこでの最終日は朝から台風の接近らしく雨風の音にさえぎられて、朝の礼拝に参加していた私は心落ち着きませんでした。雨具を持たないでしかも自転車で1時間の道程を帰らなければならなかったのです。「ああ、どうしよう！」何となく「神様、お助け下さい!!」と、お祈りをしてしまいました。集会後の大会解散時にはあたりは少し静まってきたような気がしました。そして帰りの道々で、「私の祈りが聞かれたのだろうか？」と不思議な気持ちでいたら、少し雨降りの気配がしました。「ああ、もうダメかも…。」そして再びお祈りを捧げてしてしまいました。そんなこんなで濡れずに自宅について玄関に入るや否や、突然ザーと土砂降りの雨が…。不思議に思いました。

20歳代の出来事が81歳の今も鮮明に懐かしく思い出されます。でも逆に、当時、ある真夏の昼間、矢作川の堤防上で、眼下に広がる田んぼの稲を眺めながら悠々と自転車を漕いでいたら、突然の雨におそわれました。ラフな格好での自転車のペダルをこいていて、びしょ濡れになりました。でも真夏の暑さにすがすがしさを感じ、自宅に到着。

受洗直後の同じような似た経験は、何が起きても喜びを感じたものです。

・・・・・・・・・・・・・・・・

70年経過した今はどうでしょうか…？

「人生の海の嵐に、もまれしこの身も、不思議なる神の手により…」聖歌 472 番 今の私には次から次へと試練の波が押し寄せています。

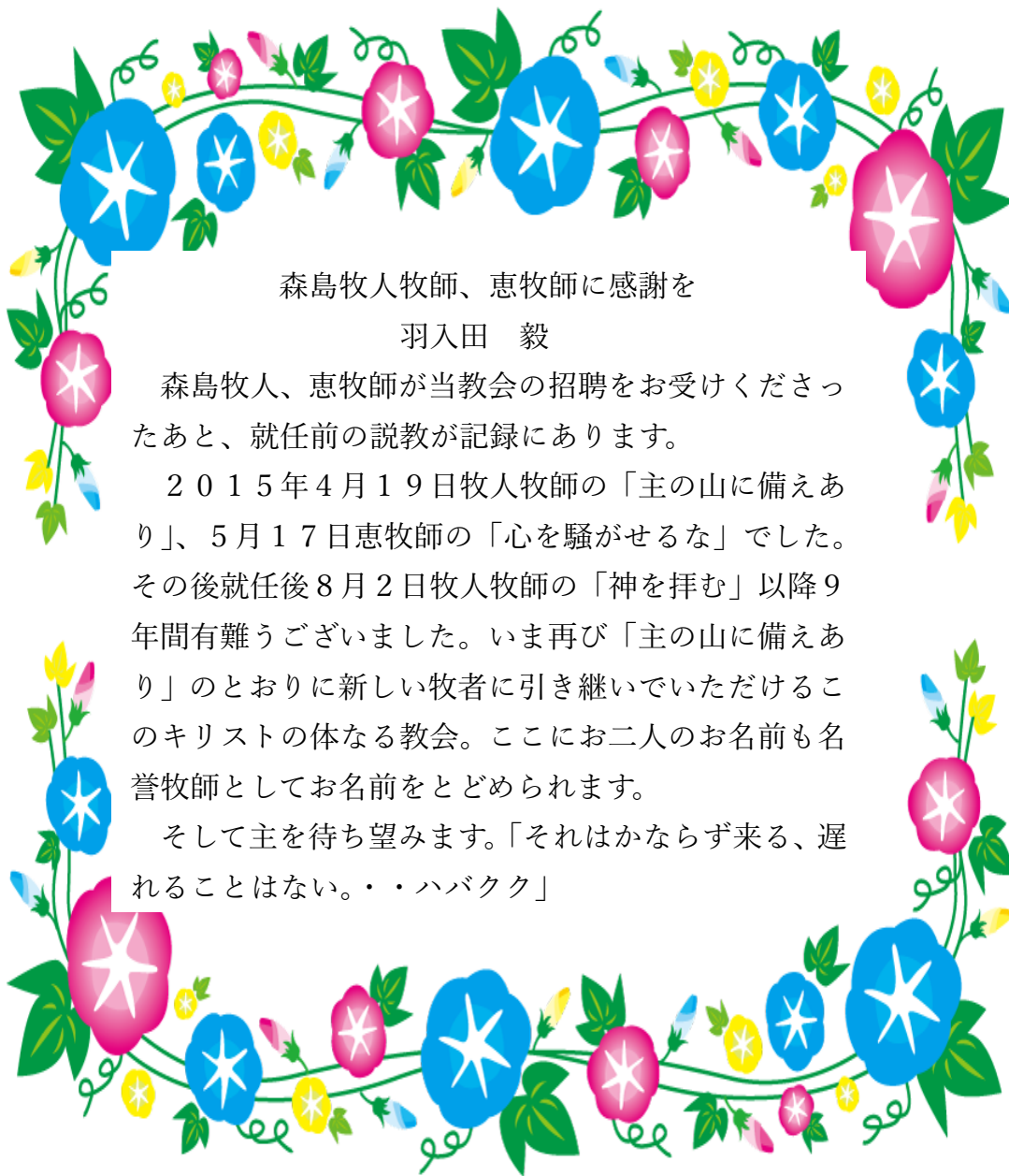
今年の教会の主題聖句「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」コロサイ書 1:23 踏みとどまりたいです。が、身心ともに衰えを感じ始め、純心だった昔と違って、癌サバイバーとして、今苦労しています。能登半島での地震災害、世界に想いを馳せれば、生命の危機に脅かされ、難民生活を余儀なくされている人々のニュースに煽られ…私の心は冷静ではありません。

心静かに「揺るぐことなく、信仰に踏みとどまる」ことができれば、幸せですね。



教会学校の児童と保護者によるカナリヤバンドが新設されました





森島牧人牧師、恵牧師に感謝を

羽入田 毅

森島牧人、恵牧師が当教会の招聘をお受けくださったあと、就任前の説教が記録にあります。

2015年4月19日牧人牧師の「主の山に備えあり」、5月17日恵牧師の「心を騒がせるな」でした。その後就任後8月2日牧人牧師の「神を拝む」以降9年間有難うございました。いま再び「主の山に備えあり」のとおり新しい牧者に引き継いでいただけるこのキリストの体なる教会。ここにお二人のお名前も名誉牧師としてお名前をとどめられます。

そして主を待ち望みます。「それはかならず来る、遅れることはない。・・・ハバクク」

編集後記（広報委員会：犬塚）

今年度は主題聖句「揺るぐことなく 信仰にとどまる」 を掲げて出発しました。並木協力牧師を迎え、新しく若き教会学校児童、保護者も与えられました。が、教会員の高齢化に伴い、元気澆刺に他の教会員を導き励まし、活躍していたと思われる方が、現在静養中。かく言う私も認知症の気配を感じながら、あかしびとを編集させていただきました。誤字脱字、ご不満があると思いますが、

どうぞお許してください。神様のご加護を祈るとともに、皆様に豊かな神様の祝福がありますようお祈りしています。

教会ホームページ：

kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp

